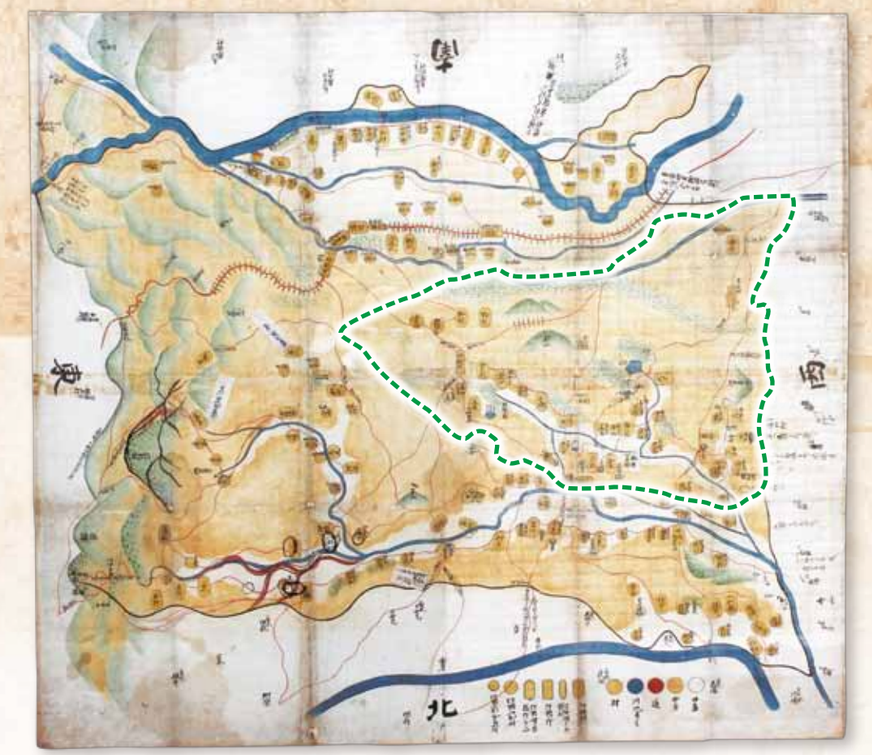
合志1300年の歴史と共に



昔の合志郡の地図 合志郡絵図（市指定文化財）弘化３年（1846）誌（合志歴史資料館蔵）
点線内がほぼ現在の合志市。上が南のため須屋が右上になります。

現在の合志市 平成24年11月現在の航空写真

１３００年前の、西暦７１３年（和銅６年）の好字令により、「合志」という地名が誕生しました。この長い歴史をたどってみましょう。

古くて新しい合志

合志の名の由来である「皮石（かはし）郡」は『日本書紀』という歴史書で、県下では初めて全国に知れ渡りました。すなわち、同書の持統天皇10年（６９６）の項に「以追大弐授…中略…肥後國皮石郡壬生諸石。…後略」という記事です。白村江（はくすきのえ）の戦いに派遣され、約30年ぶりに帰国した壬生諸石（みぶのもろいし）の苦痛を慰めるため追大弐という位を授け、さらに諸々の恩典を与えたというものです。

その「皮石郡」は、和銅６年（７１３）の「畿内七道諸国郡郷名着好字（きないしちどうしょこくぐんごうめいちゃくこうじ）」（郡郷の名には好い字をつけよ）という勅命（好字令）により志を合わせるという「合志郡」と改められたものと思われます。

時代は下り、鎌倉時代のはじめ、合志には源頼朝により中原師員が地頭職（じとうしき）として派遣され、竹迫城を築き合志郡を統治したといわれています。竹迫氏の後に竹迫城主となった合志氏と併せ約４００年間、さらにそれ以降も明治期まで竹迫を中心とする現在の合志市は旧合志郡の政治・経済の中心地として栄えました。その統治範囲は、北西部は旧七城町、北は旧泗水町、北東部は旧旭志村、東は大津町、南は現熊本市の弓削、石原、吉原、小山御領地区までも含んでいました。

明治29年（１８９６）に菊池郡との合併により約１２００年間続いた「合志郡」の名は消え「菊池郡」となりました。

その後も、純農村地帯として歩んできた旧合志町・旧西合志町ですが、昭和40年代後半から南西部に大型の住宅団地が相次いで開発され人口は急増してきます。また、工業団地にも、企業の立地が相次ぎ、三菱電機や東京エレクトロンなどの大企業も進出してきました。昭和40年代半ばに両町併せて１万８、０００人程度であった人口は、平成18年の合併時には約５万２、０００人、平成24年には５万７、０００人を超えました。

このように、合志市は北東部および北西部の穀倉地帯を守りつつも、企業の進出を積極的に受け入れ、「未来輝く産業・定住拠点都市」のスローガンのもと発展を続けています。

合志市１３００年の歩み

飛鳥	持統天皇10年（696）	肥後國皮石郡の壬生諸石が追大弐を授かる
奈良	和銅6年（713）	合志郡と改めたと思われる（「畿内七道国郡郷名着好字」の勅命による）
	養老7年（723）	肥後国恰志郡調綿壱佰屯献上（平城宮木簡）
	天平15年（743）	建部君足國か合志郡井出原の禅房で大般若経を書写（奈良・東明寺）
	天平勝宝2年（750）	この頃の木簡「合志郡鳥嶋□」（平城宮跡）合志郡紫草大根四百五十編」（大宰府都府楼跡）
平安	貞観元年（859）	合志郡の西部を分割して山本郡設置
鎌倉	建久3年（1192）	源頼朝が中原師員を合志郡の地頭職に命じる
	延元2年（1337）	中原師員（後の竹迫輝種）、後に竹迫城を築いたとされる
南北朝	永正7年（1510）	佐々木長綱が比叡山奉行となり、真木（現大津町）に館を築く。名を合志四郎入道宗真と改める
室町		竹迫氏15代（久種）、大友氏を頼り豊後に移る
安土桃山	天正13年（1585）	合志氏12代合志隆岑が竹迫城主として入城
		島津の武将島津家久・新納忠元らにより竹迫城落城
	15年（1587）	新納忠元が竹迫城から退却
	慶長5年（1600）	関ヶ原の戦い
	寛永10年（1633）	合志郡は竹迫手永と大津手永の二代手永となる
江戸	寛永13年（1636）	五箇所地嗇（黒石・兎谷・麻生田・花立・楡木）設置
	明治5年（1872）	学制発布
	6年（1873）	須屋校・黒石校（西合志南小学校の前身）開校
	7年（1874）	弘生校（西合志第一小学校の前身）開校
明治		豊岡校・竹迫校（合志小学校の前身）開校
		合併で野々島村（鳥栖本村・鳥栖辻村・鳥栖東村・鳥栖北村が合併）誕生
	8年（1875）	野々島校（西合志中央小学校の前身）開校
	9年（1876）	合併で福原村（御領村・御領出分村・上古閑村・野付村が合併）・幾久富村（二子村・油古閑村が合併）・豊岡村（原口村・群村が合併）・栄村（平島村・鹿ノ水村・中林村・後川辺村が合併）・合生村（江良村・弘生村・南弘生村が合併）・御代志村（灰塚村・大池村が合併）が誕生
		竹迫町・上庄村・上生村・須屋村は既存